

「放送の賞味期限が切れたと思わせない価値観」

北 北海道を代表する観光地“富良野市”。

富良野市が観光地としてのブランドを確立した背景には、ご存知 民放ドラマ『北の国から』が及ぼした影響が少なくないと考えた。

公共放送としてあるべき姿へのヒントが得られないものか

「放送」を通して「地域」を活性化するという、NHK が目指すべきひとつのテーマを、まさに体現されてきた野村氏に、その経歴による視点から、お話をいただいた。



野村 守一郎

ドラマ『北の国から』美術担当
現富良野観光協会観光資源管理主任

プロフィール

鹿児島県阿久根市出身。大学卒業後、22歳で倉本聰さん主宰の富良野塾に入る。卒業後は、塾の舞台製作や講演をサポートする富良野クリエイティブシンジケートに所属。ドラマ『北の国から』では美術スタッフとして活躍。2003年から、ふらの観光協会観光資源管理主任となる。『北の国から』のロケ地を巡るバスツアーのガイド役も務める。

地域に立脚する放送とは…

地域放送の充実―「放送」が「地域」に対し、どういった役割を果たすことができるのか―という視点で、北海道を代表する観光地である富良野市の観光協会で資源管理主任を務める野村守一郎（のむらしゅういちろう）さんにインタビューを行いました。

地場産業の衰退と過疎化の中で、町の観光化に活路を見出そうとする地方都市は少なくありませんが、富良野市は、行政と住民が一体となった観光都市づくりを推し進めており、例えば民放ドラマ『北の国から』^{※1}への参加協力をはじめ、現在も地元ボランティアが中心となりロケ地・ロケセットを保存、観光資源化するなどし、年間200万人が訪れる一大観光地となっています。

野村さんは、鹿児島県ご出身ですが、平成元年『北の国から』脚本家の倉本聰主催「富良野塾」に入塾後、ドラマの建築担当としてドラマ制作に携わり、現在、観光協会に勤めながら地元コミュニケーションF M局でパーソナリティーも担当するなど、地域に根ざした幅広いご活躍をされています。

地元住人と『北の国から』

―富良野といえば、『北の国から』をはじめとした倉本聰脚本の民放ドラマのイメージが強く、観光客もそのイメージ⇨北海道と捉えて訪れているという感じがします。実際に地元で生活している人の意識はどうなのでしょう。

訪れる方からは「富良野って意外と都会だな」というコメントをいただくことがあります。地元の人にしてみれば、生活の中での変化であっても、外の人からはいわゆる富良

野らしさではない進化に見えるものもあるようです。また、地元の人にとっては普段見慣れている景色が観光客にうけている景色であったりします。地元に住んでいると見えな部分に気づかされるということはあるのだと思います。

——ドラマの脚本を通して、道外の人に北海道の理想像をみせるフィクションではなく、地元・北海道の人がみて感動するもの、フィクションでありながら北海道の本当のところを描こうという想いがあつたのではないかと感じたのですが。

北海道の人たちが北海道のドラマを見て感動することは、そこに住んでいる私からみても意外な反応でした。地元の人がドラマを観たとき、あまりにも身近にありすぎる事柄が綴られているので、当初は多分テレビドラマに見えなかつたと思います。普段の自分たちの生活にあるようなことが繋がっていたのだと思います。しかし、住んでいて気がつかない視点もあると思うし、それらを脚本の中でエンターテインメント作品として質を高めることで、人の琴線に触れるようなエピソードとして、感情移入できるようなドラマに仕上がったのだと思います。

このドラマには、普遍性に通じるエピソードが多く盛り込まれておりますが、観る人の年代に応じて、心情的に共感出来る内容がそれぞれ違うのだと思います。例えば最近では修学旅行で富良野に来る前に、中学生ならこの作品、高校生ならこの作品というように、引率する先生たちが勧める作品で予習したうえでここに来たという話も聞きます(笑)。

——町の観光資源はドラマだけではないのですが、やはり根幹として、今なお放送が終了した『北の国から』が強く息づいているという印象を受けます。

ドラマはあくまでドラマであつて、フィクションであれば現地へ行つても情景・風景だけは残つていても、当然それ以上のものは無いというのが当たり前です。しかし、せめて放送を観て富良野を訪れた方々にドラマの余韻を楽しんでいただきたいという思いから、セットの保存を有志で行うようになり、それが結果的に北海道・富良野観光としての集客力向上につながりました。

ほとんど知られていない富良野の麓郷という場所に、ドラマをきっかけに人が来るようになるかもしれない、出かけた芽を何とか育てていきたいという情熱がありました。交通整理や看板作成も自分たちで行い、地域に元気を根付かせたいと、藁にもすがる想いがあつたと思います。

今でこそ、撮影ロケ地が観光地となり、人が訪れるというモデルが出来上がっていますが、今までは一般的に2、3年で流行が終わり、片付けられるというのが実状でした。いわばテレビの賞味期限を視聴者の皆さんが知っているのも現実で、寂しさを感じます。

『北の国から』は終わったドラマであつて、他に代わるものがなければダメだという声も聞くのですが、もう一度観直す、もしくは、まだ観たことのない世代の人たちが成長した時にその世界に触れることの出来る、といった「賞味期限が切れたと思わない・思わせない価値観」へ移行していったのではないかと思います。

※1「北の国から」フジテレビで放送されていた、北海道富良野市を舞台としたドラマ(1981〜2002年/脚本・倉本聰)。全22話の連続ドラマ放送後「83冬」「84夏」「87初恋」「89帰郷」「92巣立ち」「95秘密」「98時代」「2002遺言」の計8編のスペシャルドラマが放送された。

地域放送って…

——NHKは地域放送を充実させようと日々取り組んでいます。野村さんの視点から、あらためて「地域の人が求める放送」とは、どういうことだと考えますか。

NHKの『ふるさと一番』^{※2}などを見ていて思うのですが、地域の人が見て「あの地域の人はすごいな」とか「あれは自分たちにも出来そうだけどやっていないな」とか、地域の人が元気になる地域をみせたり、何かしらのヒントを得たり、地域の人は、他の地域の情報・ニュースを欲しがっていると思います。他の地域って気になりますよね。だから、すごく敏感に見ていると思います。

富良野の人は富良野以上に地域の人が頑張っている姿をみると「負けてられない」と思うかもしれないです。それから、やはり自分たちの住んでいる地域は、実はすごいなと気づかせてくれるきっかけを作ってくれることもテレビが



持っている可能性だと思っています。

また、なかなか取り上げられにくい地域、例えば遠方地域の人は、テレビをはじめとしたメディアが来ない中で、自分たちでどうしたらよいか、何かしなくてはならないという真剣な気持ちがあると思います。そういう想いをフォローする仕事だというのは未来をつくる仕事だと思います。

今は昔と比べて交通事情も大きく改善されています。帯広

局のイベント情報も、旭川局のイベント情報も、もちろん札幌の情報も、道内放送として広く扱って良いと思います。特にNHKは北海道内都市でそれぞれ細分化した放送局があるのですから、それぞれの連携の仕方、放送の仕方等工夫の余地があると思っています。

——野村さん自身、観光協会にお勤めの立場で、地域のラジオ番組パーソナリティーも担当されておられますが。

地域は、今見てまわらなければ失っていくものが多いかもしれません。

仕事場にいる時間を短くして外での情報収集にどれだけ時間をかけられるか。その時間と、地元で携わっている人とどれだけ会話ができるか。色んなことを教えてもらう時間をどれだけ作れるか。情報は足で稼がないといけないということを考えています。

情報はインターネットでも得られますが、2次情報に頼ってしまうと、情報を出す側としても力が弱くなって、聞いている人にもそれが伝わってしまわないかと思うのです。たとえば、富良野のワイン工場の職員で実際にワインのブレンドをしている人に直接コメントいただくと、ものすごく知識がある中から言葉を選んで説明してくださるので、聞いている人にとっては、自分が又聞きして説明するより、はるかに高い信憑性と情報量を受け取れるのです。

なるべくダイレクトに情報を繋げることができれば、次の放送をお客さんが楽しみにしてくれますし、何より情報が間違いないものと信頼していただけます。そしてそういう反応も小さい町の中では敏感に感じ取ることが出来、もつと喜んでいただくにはどうすればよいか、番組へ反映させようという意欲へと繋がります。

※2 「ふるさと一番」
NHK総合テレビにて
2005年から2011
年3月まで放送されて
いた生放送の情報番組。正
式名称は「生中継ふる
さと一番」。以前、N
HKで同じ時間帯に放送
していた「ひるどき日本
列島」と同様、日本各地
からの中継を基本として
いた。

こうしたことを、3年ほどやってきましたが、情報とかネタというものは、「必ず捕るぞ」と思っていたら捕れるものです。それは才能であったり、ノウハウが蓄積されているから引き寄せられるのですが、いつも動きまわって判断力を生かしながら、嗅覚を休ませない努力をしておけば、ご褒美みたいな偶然と出会うことがあります。最初はない能力ですが、育ってくる能力だと思います。

NHKには、地域の人から投稿された映像などを積極的に採用したりと、各地のアマチュアカメラマンとのネットワークが太く、民放などにはない強みを持っていると思います。この特色をもっと進化させてもいい時代かもしれないですね。

信頼を勝ち取るための手法は、小手先ではないと思います。時代に応じた変化も必要ですが、NHKには脈々と受け継がれてきた変わらない何かがあるはずで、情報の即時性が求められるのが現在の風潮ですが、冷静な分析と判断による確実な放送、そうやって積み重ねてきた信頼は

守り通してもらいたいと思います。

インタビューを聞いて

本文に書き切れていませんが、このインタビューを通じて強く印象に残っているのが、野村さんから聞かれた「繋がり」「コミュニケーション」そして「信頼」というワードでした。情報を発信して、それで終わらせることのないように「放送の賞味期限が切れたと思わせない価値観」という言葉も、そうした繋がりや信頼から生まれてくるものではないかと、これからの私たちの在り方の一つのヒントのような気がして幅広くお話をお伺いしました。

本筋から逸れますが『北の国から』の次回作については「観たいという人たちの声が可能性を生む」とのこと。ラジオの中で、野村さん自身、そうした人たちの声を紹介するコーナーを楽しんでおられ、放送・観光と、本当に地域密着という理想的な姿をみた思いました。

報告 北海道支部帯広分会長 佐藤孝洋

